Anna Brownell Jameson のオフィーリア像

シェイクスピア受容における女性の性格批評

風間　彩香

本発表では、性格批評(character criticism)に立脚し、初めてシェイクスピア劇の女性キャラクターに光を当てた Anna Brownell Jameson(1794-1860)の *Characteristics of Women, Moral, Poetical, and Historical* (1832)におけるオフィーリア像を分析する。性格批評は、劇中のキャラクターを生身の人間と見なし、その精神構造や性格造形に注視した、19 世紀に活発化した批評様式である。実は性格批評を中心的に担ったのは Jameson を始めとする女性批評家であったが、1960 年代以降、性格批評は原作を離れて主観的な印象に頼りすぎるとの理由からシェイクスピア批評としては正当な評価を受けてこなかった。しかし、女性批評家の視点や試みは二次創作など現代のシェイクスピア受容に確実に受け継がれている。そこで本発表では、Samuel Taylor Coleridge(1772-1834)や John Ruskin(1819-1900)の言説との比較や、ヴィクトリア朝の女性観、フェミニズムの文脈から Jameson のオフィーリア像を明らかにするとともに、彼女の姿勢が後のオフィーリア受容に継承されていることを示す。

1. 家父長的見地における「性格がなく弱い女」としてのオフィーリア像

性格批評の代表的論者である Coleridge はそのハムレット論の中で、オフィーリアの「性格の欠如」(the absence of characters)を指摘する(230)。Coleridge はこの性質を理想的な妻の資質であると考えていた。「女性」というテーマの談話において、Coleridge は「性格がない」という語を男性に逆らうことなく従順である性質として定義し、そうした性質をもつオフィーリアを理想の妻として賞賛している(533)。Coleridge のオフィーリアに対する見方は、ヴィクトリア朝における女性観に重なる。性別役割分業と良妻賢母的女性像を唱え、ヴィクトリア朝に影響力の大きかった婦人論である Ruskin の“Of Queen’s Gardens” (1865)においては、シェイクスピア劇の女性キャラクターについての言及がある。ここで Ruskin は男性を支え助ける存在として女性キャラクターの重要性を指摘するが、一方でオフィーリアについては重要なときにハムレットを救い損ねる点で「弱い女」(weak woman)と断罪する(51-2)。一見すると、オフィーリアに否定的な Ruskin と肯定的な Coleridge は対照的である。しかし、どちらも男性との関係性や男性への貢献の度合いという尺度から女性やオフィーリアの功罪を判断している点で、根本の思想は共通している。つまり、両者にとって、オフィーリアの価値は男性に仕えることによって初めて生じるものであった。

2. 女性読者のための反面教師としての Jameson のオフィーリア像

一方で、Jameson は女性に「性格」は必要ないとする Coleridge の意見に反論する。ある旅行記の中で Jameson は、オフィーリアの悲惨な運命を喚起した上で、女性が独立して幸せに生きていくためには、男性の愛情に依存せずとも独力で生きていけるような精神力や活発さといった「性格」が必要であるとの立場を明確に表明している(*Winter Studies*, 146-7)。しかしながら、女性が力強く生きていく上で「性格」の必要性を訴えたものの、Jameson がオフィーリアに見出した個性はハムレットへの愛であり、ヴィクトリア朝社会において女性に求められた最も基本的な性質のみであった。

オフィーリアの存在意義をハムレットへの愛にしか見出さない Jameson のオフィーリア像は男性批評家の見方と共通する。しかし、Jameson が男性批評家と異なるのは、オフィーリアが悲惨な状況に陥った理由を推量する点である。Jameson はオフィーリアと *Tempest* (1623)の女性キャラクターであるミランダとを比較し、好ましい環境下で成長したミランダとは対照的に、劣悪な環境に置かれた犠牲者としてオフィーリアを位置づける(*Characteristics*, 153-4)。Jameson によれば、オフィーリアは幼いころから腐敗した宮廷に連れてこられ、王妃ガートルードの侍女となったという。こうした生活環境により心も人格も成熟せず、自身の感情に気付かなくなってしまい、これがオフィーリアの悲劇につながったと Jameson は考える(*Characteristics*, 155-7)。つまり、Jameson はオフィーリアの悲惨な境遇を憐れむだけではなく、その原因にまで踏み込み、悪辣な成育環境のためであったと結論付ける。

Jameson のオフィーリア像は著書の目的と関係している。序章では、シェイクスピア劇の女性キャラクターをめぐる因果関係を描くことで、現実社会における女性の地位や女性教育の誤りを糾弾し、生身の女性を模した女性キャラクターを通して読者に教訓や推論を引き出してもらうことが狙いであると述べられる(*Characteristics*, 4-5)。Jameson は、原作では描かれない背景を推量し、女性キャラクターを読み直すことで、主

に女性読者に道徳的教訓を引き出してもらいたいと考えていた。つまり、オフィーリアを劣悪な生育環境に置かれた犠牲者としてとらえ直すことで、読者が教訓を引き出すべき反面教師としてとらえた。

3. Jameson の継承者たち

Jameson のオフィーリア論は後に受け継がれた。19 世紀から 20 世紀初めにかけて Jameson の姿勢を継承したのは主に女性批評家や女優であったが、彼女たちの立場は主に、ハムレットを助けられなかったオフィーリアの弱さを断罪する否定派、オフィーリアに強さをも見出そうとする擁護派、オフィーリアの弱さの背景に幼少期の影響があることを主張する環境派の 3 つのタイプに分けられる。どの立場もオフィーリアを分析の中心に据え、その性格や幼少期について分析する点で、Jameson の主張を継承していたと言える。

20 世紀後半から 21 世紀に入ると、時代潮流に沿うようにオフィーリアの物語を大幅に書き換えようとする動きが起こる。オフィーリアの視点から原作を読み直した Lisa Klein の *Ophelia* (2006)では、ヤング・アダルト小説としての性質上、オフィーリアは自分の人生を切り拓きたくましく生き抜く存在として現代少女にとってのロールモデルに変容している。この小説は 2018 年に映画化され、*Star Wars: The Force Awaken* (2015)で女戦士レイ役を務めた Daisy Ridley (1992-)を主役に据えることで、その強さがさらに強調されている。

近年では、オフィーリアはさらに多角的にとらえられるようになってきている。Twitter 上で「#名画で学ぶ主婦業」として話題となった、主婦の心の叫びを名画に重ね合わせるシリーズでは、オフィーリアは節約のために仕舞い湯で全身を温めようとする主婦となっている。また、「死ぬときぐらい、好きにさせてよ」のキャッチフレーズで樹木希林(1943-2018)が体現したのは、自分なりの死を自分なりのタイミングで遂行できた存在としてのオフィーリアであった。ヴィクトリア朝においてはオフィーリアの死は回避すべき悲劇ととらえられたが、高齢化が急速に進む現代日本社会という文脈において、オフィーリアの死は自律性を体現したものとして肯定的にとらえられている。

おわりに

フェミニズム批評家の Elaine Showalter (1941-)は「オフィーリアの表象は、この芝居やハムレットの意味についての理論とは無関係に変化する。それは、女と狂気に対する態度に左右されるのだから。」(91-2)と述べた。確かに女性表象や女性の立場の見直しをめぐる社会の動きを反映してオフィーリア像は変化してきた。しかし、死生観との関連でオフィーリアをとらえた樹木の事例に見られるように、オフィーリアをめぐる問題は女性だけにとどまらず、高齢化社会を迎えこれまでの死生観が揺らぎつつある人々全体が共有するものとなっている。性格批評の手法でオフィーリアを分析し、女性読者のための反面教師としたジェイムソンの試みは、脈々と受け継がれ、現代におけるオフィーリアは女性の生活の写し鏡となり、女性の生き方を示唆するロールモデルとなり、または死生観の転換を訴えるプロパガンダともなっている。今後もオフィーリア像は変幻自在に変容し続ける。

引用文献

Coleridge, Samuel Taylor. *Lectures and Notes on Shakespeare and Other English Poets*. 1811-8. London: G. Bell and Sons, 1884.

Jameson, Anna Brownell. *Winter Studies and Summer Rambles in Canada*. New York: Wiley & Putnum, 1839.

- - -. *Characteristics of Women, Moral, Poetical, and Historical*. 1832. New York: AMS Press, 1971.

Klein, Lisa. *Ophelia*. London: A& C Black, 2006.

Showalter, Elaine. “Representing Ophelia: Women, Madness, and the Responsibilities of Feminist Criticism.” *Shakespeare and the Question of Theory*. Eds. Patricia Parker and Geoffrey Hartman. New York: Methuen, 1985. 77-94.

Ruskin, John. *Sesame and Lilies: The Two Paths and the King of the Golden River*. 1865. London: J.M. Dent & Sons. Ltd, 1913.